

「シンデレラ」の固定観念を覆す —ジェンダー学的観点からのグリム童話解釈—

野 口 芳 子
(武庫川女子大学文学部英語文化学科)

A Subversive View of Conventional Ideas about 'Cinderella' — A Study of Grimms' Fairy Tales from the Perspective of Gender Studies —

Yoshiko Noguchi

*Department of English Culture, Faculty of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya, 663-8558, JAPAN*

Abstract

'Cinderella', one of the most popular fairy tales in Japan, is known as the version of written text by Walt Disney. However, 'Cinderella' is not a literary work, but folklore, which has been orally handed by European folks from generation to generation, and collected by Charles Perrault and the Brothers Grimm in their books of fairy tales.

In this paper, I take up the text of 'Cinderella' from Grimms' Fairy Tales and try to interpret the meanings of metaphors in this folklore. Through the research for this paper, the image of the heroine changes dramatically. No fairies and no glass slippers appeared in the text, but only a hazel twig and golden slippers appeared there. These differences give the heroine quite a different image. Being passive and obedient, the heroine changes into a proactive and powerful woman. Despite the word 'Cinderella-Syndrome', which represents women who remain passive and just wait patiently, the European folklore depicts Cinderella as a clever, nasty and athletic woman. This paper offers a challenge to conventional ideas about Cinderella from the perspective of history, ethnology and Gender-Studies.

1. 序言

「白雪姫」「シンデレラ」「赤ずきん」「ヘンゼルとグレーテル」「いばら姫(眠れる森の美女)」などはグリム童話に含まれている話で、たいていの人には幼い頃に絵本やアニメーションなどの形で親しんできている。しかし、一般に広まっている話と原文の話とは相当異なっているということについては、案外知られていない。一時期、『本当はおそろしいグリム童話』という本が有名になったが、同書はあくまでフィクションであり、グリム童話の原文に忠実な解釈ではない。題名に惑わされて、そう思い込んでいる人もいるようだが、同書はグリム兄弟の原作とは程遠いもので、著者である桐生操が自分の想像力を使って書いた文学作品である。つまり、グリム兄弟の手書き原稿(初稿)、初版、決定版などドイツ語の原典を丁寧に調べるとい作業をせず、自分の想像力で作りあげた作品なのだ。

グリム童話とはグリム兄弟が自分の想像力で作りあげた創作童話ではなく、かれらが収集した昔話(メルヒェン)¹⁾を収録したものなのだ。正式な題名は『グリム兄弟によって収集された一子どもと家庭のメルヒェン集(Kinder-und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm)』という。初版が出版されたのは1812年(第1巻)と1815年(第2巻)、第2版が1819年、第3版が1837年、第4版が1840年、第5版

が1843年、第6版が1850年、第7版(決定版)が1857年である。手書き原稿である初稿(1810年)を入れると、グリム童話集のテキストは8種類もあるのだ。

グリム兄弟は原稿執筆後、48年にわたってメルヒェン集に手を加え続けた。各版のテキストを比較してみると、その改筆の手法が浮かび上がってくる。19世紀前半から半世紀かけて行われた改変部分を詳細に調べてみると、「近代化」された面と「中世化」された面が併存していることがわかる。つまり、グリム兄弟はメルヒェン集を普及させるため、読者であるビュルガー(富裕市民)の価値観に合うよう近代化した。同時にメルヒェンを昔の調和に満ちた時代に民族全体の中からあふれ出た自然文学であると捉えていたので²⁾、「中世化」をことさら強調する必要があったのだ。ようするに、グリム童話のなかには、グリム兄弟が生きていた近代という時代の価値観と、ドイツ民族が1つの国に所属していた神聖ローマ帝国時代の中世の価値観が交錯しているのである。

この論文ではグリム兄弟による書き変えに目を向けながら、伝承文学であるメルヒェンが持つ様々なメタファーを解明することによって、グリム版「シンデレラ(灰かぶり)」に含まれている西洋中世や近代の価値観に注目し、女性や男性に求められる社会的期待、すなわちジェンダーが、時代によって社会によって異なるものであるということを明らかにしていきたい。

2. グリム童話集成立の時代背景

ところでグリム兄弟が童話集編集に当たった1810年(手書き原稿)から1857年の間とは、どのような時代なのだろう。グリム童話の解釈に入る前に、まず時代背景について概観しておく必要がある。

グリム兄弟がメルヒェン集の初稿を書きあげた1810年は、ドイツはナポレオンが率いるフランス軍の支配に苦しみ、諸侯の分割統治の中で、政治的にも文化的にも打ちひしがれていた頃であった。敗者であったドイツは、勝者であったフランスから流れ込んできたり、押し付けられたりした市民的改革や、産業革命以降の資本主義体制を歴史的必然として捉えることができず、逆にそれに激しく反発して、自らの理想をドイツ民族が結束していたかつての神聖ローマ帝国(Heiliges Römisches Reich, 962-1806年、中世に現在のドイツ、オーストリア、チェコ、イタリア北部を中心に存在していた政体)に見ようとしていた。そのような時代のなかで当時ロマン派の人々が中心となって、民族文学によって愛国心を高め、連帯感を強めようという動向が活発になり、文学におけるフランスへの追従を避け、ドイツ民族全体の独自の文学を追求し、自らの再生と統一を目指す傾向が顕著になったのだ。

グリム兄弟の調和に満ちた輝かしい古代とは、キリスト教の神の楽園が実現していた時代を指すようであるが、歴史的、政治的に実在していた栄光に満ちた中世の統一国家、神聖ローマ帝国を指していたのである。彼らは当時の政治的束縛を越えたドイツ民族全体の文学を「国民文学」であり、同時に「自然文学」であると捉え、メルヒェンの中にそれを見ていたのである³⁾。グリム童話を読み解く際に注意しなければならないのは、グリム兄弟のメルヒェンに対するこの複雑な捉え方である。

3. ディズニー版「シンデレラ」とグリム版「灰かぶり」

(1) 「シンデレラ」と「灰かぶり」についての概観

シンデレラの話を知らない人はまずいないほど、日本人はこの話をよく知っている。しかしたいていの場合、それはグリム童話のシンデレラではなく、ウォルト・ディズニーによってアニメ化されたシンデレラである。グリム童話のシンデレラは「灰かぶり」というタイトルで童話集の21番(KHM21)⁴⁾に収録されている。「灰かぶり」には魔法を使う妖精も、かぼちゃの馬車も、ガラスの靴も出てこない。ハシバミの木(ヘーゼルナッツの木)が出てくるだけだ。また、灰かぶりは過酷な仕事に黙って耐える消極的な女性ではなく、運命を自分で切り開く知性と運動能力に富んだ積極的な女性である。そのうえ、彼女は自分が幸せになると、いじめた人に報復を行う。ようするに、彼女はか弱く従順でおとなしい娘などではなく、賢明で機敏でしたたかな娘なのだ。

ここでは、現代の私たちが読んでも圧倒されるそのグリムの「灰かぶり」について詳しく見ていくことにする。しかし、その前にまず、ディズニーとグリムの「シンデレラ」について、それぞれのあらすじを確認しておこう。

(2) ワォルト・ディズニー版「シンデレラ」のあらすじ

継母と2人の姉たちは、朝から晩までシンデレラをこき使う。ある日、国中の娘たちを集めて舞踏会を開催するという知らせが城から届く。ネズミや小鳥が作ってくれたドレスを着て、シンデレラも一緒に舞踏会に行こうとするが、姉たちに拒否され、ドレスを破かれる。泣いているシンデレラの前に妖精が現れ、杖を振って「ビビデ・バビデ・ブー」と呪文を唱えると、かぼちゃが馬車になり、ネズミが馬になり、犬が召使になる。また、シンデレラ自身の服も素敵なドレスになり、靴はガラスの靴になる。妖精と夜中の12時までに帰宅するという約束をして彼女は城に行く。城に着くとすぐ王子が来て、シンデレラをダンスに誘う。シンデレラは素敵な王子にうっとりする。12時になり、大急ぎで家に戻ろうとするが、ガラスの靴を片方落してしまう。ガラスの靴が合う娘を妃にすると王子が宣言したので、ガラスの靴を娘に試着させるため、家来が国中の家を訪問する。シンデレラの家にも来たので、姉たちは履こうとするが、足が大きすぎて入らない。シンデレラの番になると、継母は杖でガラスの靴を壊してしまう。すると彼女は「もう片方を持っているわ」と言って、それを履くとぴったり合う。家来たちは大喜びで彼女を城に連れて帰る。シンデレラは王子と結婚して、いつまでも幸せに暮らす⁵⁾。

(3) グリム版(決定版)の「灰かぶり(KHM21)」のあらすじ

母が死んでから、娘は毎日母の墓に行って泣く。金持ちの父は再婚し、2人の娘を連れて継母がやってくる。姉たちは、顔はきれいで色白だが、心は汚く真っ黒だ。継母と姉たちは娘を「灰かぶり」と呼び、女中として酷使する。父は歳市の市に行くとき、土産に何がほしいかと娘たちに聞く。姉たちは「きれいなドレス」や「真珠と宝石」と答えるが、灰かぶりは「父さんの帽子に当たった若枝」と答える。父は灰かぶりに「ハシバミの若枝」をやる。灰かぶりはそれを母の墓に植えて泣く。

王が婿選びのため3日間宴を催し、国中の美しい娘を招待する。灰かぶりは姉たちと一緒に自分も連れて行ってくれと継母に懇願するが、拒否される。執拗に頼むと継母は根負けして、灰の中に撒いたひら豆を時間内に選りわけたら連れて行くと言う。その課題を2度ともこなすが、ドレスがないという理由で継母は灰かぶりを置き去りにする。灰かぶりは墓に行き、ハシバミの木にドレスが欲しいと訴える。すると木は金と銀のドレスと銀糸で刺繍した靴を落してくれる。それを身につけて灰かぶりは宴に行く。王子が来て灰かぶりをダンスに誘う。日が暮れてきたので灰かぶりは暇乞いをする。送るという王子を振り切って、灰かぶりは鳩小屋に飛び込む。娘が鳩小屋に飛び込んだと王子が言うと、出てきた父は灰かぶりではないかと思い、斧とつるはしで鳩小屋をたたき割る。しかし、中には誰もいない。次の日も灰かぶりはハシバミの木に金銀のドレスを出してもらい、宴に行く。王子と踊ってから、全速力で走って帰り、梨の木に飛び乗る。娘が梨の木に飛び乗ったと王子が言うと、そこにいた父親は斧で梨の木を切り倒すが、木の上には誰もいない。3日目はハシバミの木は金のドレスと金の靴を出してくれる。それを身につけた灰かぶりは最高に美しい。王子と踊ってから、また1人で走って帰ろうとする。しかし王子が階段にタールを塗っていたので、左の靴がくっついて脱げてしまう。

王子は金の靴を持って、娘の父親の家に行き、この靴がぴったり合う人を妃にするという。上の姉が試着するが、親指が大きすぎては入らない。母はナイフを渡して親指を切れという。親指を切って足を靴に押し込んで、王子の前に出ると、花嫁だと思って王子は彼女を馬に乗せる。墓の前を通るとハシバミの木に止まった2羽の鳩が、靴から血が出ている、偽の花嫁だと知らせる。王子は偽の花嫁を連れて引き返す。下の姉が試着すると、かかとが大きすぎて入らない。継母の助言に従って、ナイフで切って足を靴に押し込むと、王子は花嫁だと信じて彼女を連れていく。墓の前で鳩に言われて、出血しているのを見て偽者だと悟り、引き返す。他に娘はいないかと王子が聞くと、「おりません。前妻の娘がいるが、できそこないなのでとても花嫁になぞなれない」と父が答える。継母も猛反対するが、王子は娘を連れ

てくるよう命じる。灰かぶりが金の靴に足を入れるとぴったり合う。立ち上がったとき顔を見ると、王子はあの娘だということに気づく。

王子は灰かぶりと結婚する。結婚式に招待された姉たちは教会に行くとき花嫁花婿の左右に付き添う。鳩たちがやってきて姉たちの目玉をつつき出す。教会から出るときも鳩たちがきてもう片方の目玉をつつき出したので、姉たちは全盲になってしまう。意地悪をしたり嘘をついたりした罰が当たったのだ⁶⁾。

(4) ディズニー版とグリム版の比較

ディズニー版ではシンデレラに美しい衣装を与えてくれるのは、どこからともなく突然現れる妖精だが、グリム童話では灰かぶりが自ら父親に持参するよう頼んだハシバミの木だ。また、ディズニーではガラスの靴だが、グリムでは金の靴だ。宴が開催されるのはディズニーでは夜で、12時までには帰宅するという約束だが、グリムでは日中に行われ、夕方に帰宅する。継母の連れ子の姉さんたちは、ディズニーでは意地悪で外見も醜いが、グリムでは意地悪だが外見は美しい。王子に関してはディズニーではシンデレラがうっとりとするほど美しいが、グリムでは美醜に関する描写がない。ただ、自分より走るのが速くて追いつけないので、王子は階段にタールを塗って娘を捕まえようと画策する。ディズニーでは、家来が靴を持って国中の家を訪問するが、グリムではあらかじめ見当をつけたシンデレラの家だけに、王子が自ら靴を持って現れる。ディズニーでは父親は現れないが、グリムでは実の娘に残酷な仕打ちをする父親が登場する。ディズニーではシンデレラは1人で走って帰るが、グリムでは毎回王子が追いかける。全速力で走るシンデレラに追いつけず、家の近くに来ると木の枝に飛び移ったり、鳩小屋に潜り込んだりする運動神経抜群の娘に王子はお手上げ状態で、そばにいた父親らしき男に助けを求める。父親は王子の訴えを聞いて、その娘はシンデレラだと思う。娘を捕まえるというより、殺そうとして斧で木を切り倒したり、鳩小屋を打ち壊したりする。娘は毎回、すばやく移動してことなきを得る。ディズニーでは靴を試着するとき足が大きすぎて入らないと、姉たちはすぐあきらめるが、グリムでは継母がナイフを出して足を切らせて、無理やり靴に入れさせる。王子は靴に足が入ると、花嫁だと信じて顔も見ずに連れていく。鳩に出血を教えられて、初めて王子は偽者だとわかる。ディズニーではシンデレラと王子の結婚式で話が終わるが、グリムでは悪い姉たちは鳩に目を突かれて全盲にされたという懲罰で話が終わる。

これらの相違点がそれぞれどのような意味をもっているのか、次章ではそれぞれの項目に分けて詳しく考察していく。

4. グリム版とディズニー版の相違点についての考察

(1) ハシバミの若枝

父に土産に何が欲しいかと聞かれて、灰かぶりは「帰り道で最初にとうさんの帽子に当たった若枝」が欲しいという⁷⁾。洋服や宝石を頼む姉たちに比べて、灰かぶりの依頼は一風変わっている。これは一体何を意味するのだろうか。彼女は姉たちと違って自然の草木を愛する慎ましい娘だという解釈も成り立つ。だが、そうだろうか。ハシバミの若枝は母の墓に植えると、望むものを何でも与えてくれるのだからただの若枝ではない。特別な意味を秘めた若枝であることは確かだ。決定版に出現する若枝は、最も古いテキストである初版(この話は初稿には収録されていない)では、ハシバミの若枝(Haselreis)ではなく、ただの小さな木(Bäumlein)である。そして、その小さな木を娘は父に要求するのではなく、臨終の床で母から植えるよう言われるのだ。「小さな木を私の墓に植えなさい。欲しいものがあれば木を揺すりなさい。落してくれるから」と言い残して母は亡くなる⁸⁾。

グリム兄弟が単なる若枝をハシバミの若枝に変えたのは第2版からだ。決定版と同じ表現で「父親は緑の藪に馬を進めたとき、ハシバミの若枝が帽子を突き落としたので、その枝を折り取った」⁹⁾とある。小さな木をハシバミの若枝に変えたのはなぜなのか。また、なぜ若枝がこれほど強力な力を保持してい

るのだろう。

グリム兄弟の『ドイツ語辞典(Deutsches Wörterbuch)』によると、「若枝は法律の象徴(reis als rechtssymbol)」であり、渡された若枝を土(Scholle)に埋めるということは、慣習法では遺産の譲渡と相続の完了を意味する¹⁰⁾。また、ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学(Deutsche Mythologie)』によると、ハシバミの若枝は「魔法の枝」(Wünschelrute)として用いられ、それは、「宝物をもたらしただけでなく、姿形をより一層優れたものにしてくれた(die wünschelrute brachte nicht nur schätze zuwege, sie stärkte und mehrte fortwährend ihren gestalt)」¹¹⁾そうだ。例えば地下の水脈や鉱脈を当てるときにも、ハシバミの若枝が「占い棒(Wünschelrute)」として用いられたそうで¹²⁾、その場合 Wünschelrute は「金の枝」と呼ばれたそうだ¹³⁾。ハシバミの若枝(Haselreis)は古代から 'Wünschelrute' として、呪力や魔力を持った存在、つまり「魔法の枝」、「占い棒」、「金の枝」として民衆に親しまれていたのだ。

グリム兄弟はマールブルクのエリーザベト養老院にいた年老いた女性からこの話を聞いたそうだが、残念ながらその原稿は紛失している¹⁴⁾。初版の話はおそらくその原稿にもとづいたものであろう。初版の小さな木(Bäumlein)を彼らは第2版からハシバミの若枝(Haselreis)に変える。その理由は後から口承で収集した2つの類話を入れて話を再構成したからだ¹⁵⁾。ハインリッヒ・レオポルド・シュタインが語った「ハシバミの若枝を墓に植える話」に彼らが飛びついたのは¹⁶⁾、ハシバミには 'Wünschelrute' としての力があり、魔法の力で娘を美しくし、金の服や金の靴を与え、素晴らしい未来をもたらす「占い棒」としての力があるという民間信仰を知っていたからであろう。

そうなると父親にハシバミの若枝を要求した灰かぶりは、古い時代のゲルマンの法律や慣習に明るい賢明な女性ということになる。彼女はハシバミの若枝をもらうことで、実の母親が亡くなったときの遺産譲渡を父親に迫ったのだ。権力や地位の象徴である帽子¹⁷⁾を突き落とした枝を娘に与えるということは、亡き実母の遺産を父親から娘に移譲するということを意味する。ゲルマン社会には、女性が死んだ場合、女性から女性へと受け継がれるゲラーデ(Gerade)という財産がある。主として女性が結婚時に持ってきた品物で、家財道具や衣服、装飾品、化粧品などを指すが、そのゲラーデは、母親が死んだら娘が相続することになっている¹⁸⁾。妖精が現れて美しくしてくれるのではなく、灰かぶりは「債務を負った者が債権者に木の枝あるいは藁楷を渡す」¹⁹⁾という法律の知識を駆使し、法的手段で遺産を獲得し、財力を身につけたのだ。

初版では母親の遺言であったものを、第2版以降、グリム兄弟の書換えにより、娘は自らの知識と行動力によって、それらを獲得したことになる。そこには家の外での生産者と家の中での消費者という男女の役割分業を生み出した近代社会の価値観ではなく、様々な生産活動に従事していた中世の女性²⁰⁾の権利意識が表われている。母親が遺言する初版にせよ、娘が慣習法を駆使して主張する決定版にせよ、グリムの「灰かぶり」では豊かな法知識を持って積極的に行動している女性が、自ら幸せを呼びよせている。妖精がどこからともなく現れて、魔法の杖であらゆるものを出し、美しく変身させてくれるディズニー版「シンデレラ」とは、自力本願か他力本願かという点で大きく異なっている。

(2) 金の靴

靴という語はドイツ語では、通常 Schuh (靴の総称)という。しかし、Stiefel (長靴)や Pantoffel (ミュール)という言葉も存在する。「灰かぶり」に出てくる金の靴は、Schuh ではなく Pantoffel なのだ。つまり、後部が開いているサンダル状の靴、ミュールなのだ。ミュールだとサイズが小さくても足は靴に入る。それが入らないということはどういうことなのだろう。足ではなくて、体の他の部位のサイズを暗示しているのではないだろうか。

王子は足が靴に入ると、顔も見ずに花嫁だと確信する。しかし靴から出血しているのを見ると、すぐ偽者だと悟る。出血しないのは、靴が足にぴったり合う灰かぶりだけだ。まるで足と靴はペニスとヴァギナを象徴しているかのようだ。

結婚相手を選ぶ王家の宴ではダンスが行われた。ダンスは元来農民が豊穡を祈願して神々に捧げた儀式だった。実りを象徴する行為(性交)があったり²¹⁾、対舞では「男と女がセックスで引き寄せられ、近

づいたり、離れたりたり]する動きがあったり²²⁾、エロティックな要素を多分に含んでいた。実際、フランスのアルピ市(タルン県)では「カーニヴァルの最終日、働く少女のためのダンス[灰色のダンス]に出かけたこの町の娘たちのうち24人が妊娠した」とクテール医師が1809年の診断書に記入している²³⁾。また、ドイツのバイエルンでも19世紀初頭、「ダンスに行った若い女性が家に送ってもらう途中でセックスをするということに驚いた」と役人が報告している²⁴⁾。

集団で踊る農民に対して、貴族は男女が対になったカップルダンスを踊るので²⁵⁾、ダンスに名を借りて、性的相性を試す行為が行われたとしても不思議ではない。なぜなら、王家にとっての最大の関心事は後継者の有無であったからだ。王家の宴という、現在では上品で格調高いものと思われるが、中世では宴はアジール(聖域)として²⁶⁾、法的制裁を受けない場とされていた。当然、無礼講な行為が横行する可能性はあった。「靴を脱がされることは、恥辱を表す」²⁷⁾といわれているが、タール塗布という謀略によって無理やり左の靴を脱がされたという表現は、性行為の強要をメタファーとして伝えているのかもしれない。

そもそも靴は非常にエロティックな意味を持っている。中世の女性は通常長いスカートを履いているので、足や靴は外からあまり見えない。西洋では家の中でも靴を履いているので、靴を脱ぐのは寝るときだけだ。「靴を渡すことは、所有権の移譲を表す」²⁸⁾とか「左の靴が脱げないために彼女は出産できない」と謡うバラードも存在する²⁹⁾。灰かぶりの靴が脱げるのは、初版では「片方の靴」だが、決定版では「左の靴」になっている。グリム兄弟が第2版で「左の靴」に変えたのだ。左の靴が脱げる女性が出産できるという言い伝えを知っていたからだ。そのうえ灰かぶりの靴は金である。金は小麦の穂の色で豊穡を表す³⁰⁾。つまり、彼女は出産可能というだけでなく、出産能力に富んだ女性であるのだ。また、サンダル(ミュール)は貴族の履きものとされており³¹⁾、ケルト人の「金箔をはった靴」は王権を表すといわれている³²⁾。金の靴(ミュール)に王子がこだわるのは、おそらく灰かぶりの富と地位と出産能力に心を奪われたからであろう。少なくとも顔や姿の美しさではなかった。

(3) 美しさの基準と価値

結婚の条件に女性の美が求められるようになったのは、近代以降のことである。中世では結婚は法行為であり、家の存続のため子孫の確保と財力の強化を期待して行われた³³⁾。愛情の有無が重視されることはなかったのだ。妻にする女性にまず求められるのは、家柄と財産と出産能力であり、美しさではなかった。美しさは恋愛においては重視されたが、それは結婚に結びつくものではなかった。恋と結婚は結びつかないものとされ、娘をいかに恋愛から遠ざけ、うまく結婚させるかが親の関心事項であった³⁴⁾。恋愛結婚が推奨されるようになったのは、近代になってからの話である。

女性に美の価値が規範として押しつけられたのは、産業革命にともなって、女性が労働から疎外されたからである。機械化され、工場化された生産の場では、産む性としての女性は、定時労働には不向きな存在となり、男性に比べて役に立たない存在となると同時に、美的存在となっていった³⁵⁾。「男は美しくあってはいけない。それは労働の価値を損なうからだ」³⁶⁾。つまり、近代化にともなって、「男は美から疎外され、女は美へと疎外される。別な言い方をすれば、男は生産へと疎外され、女は生産から疎外」されていったのだ³⁷⁾。

ペローの話でも醜くはない継姉たちをディズニーが変え、「シンデレラを美人、継姉たちを醜人」にしたのは、「美しい女は善人、醜い女は悪人」という近代のステレオタイプのイデオロギーを挿入したからであろう。所有される性としての女性は、美しくなければ男性にとって「いい女性」ではなく、価値のない存在、すなわち「悪い女性」であるということになる。だが、近代の価値観に染まっていないグリム童話では、女性の美しさは容姿ではなく、豪華な衣装や髪の毛で表現されている。なぜなら、中世では「美」とは、「豊かさ」を示すものであったからだ³⁸⁾。灰かぶりの場合もそうだ。美しいとは表現されているが、それは金や銀の衣装や靴であって、女性の目鼻立ちやスタイルではない。王子の場合は美しさに関する記述自体がない。ディズニーでは「シンデレラは素敵な王子にうっとりする」と王子の美しさに関する描写を入れているが、グリムではまったくない。地位や名誉や財産がある王子には、美しさなど重視すべ

き事項でなかったからだ。中世では結婚は恋愛感情の有無とするのではなく、平和と家と財産のためにするべきものだったのだ。

(4) ガラスの靴

ガラスの靴という表現はシャルル・ペローの『童話集』（1697年）からとったものだ³⁹⁾。ヴェールというフランス語には銀リスの毛皮(vair)とガラス(verre)という同音意義の単語があり、書き取る際に両者を間違ったのではないかという説がある。上級貴族しか使用できない素材である銀リスの毛皮⁴⁰⁾なのか、現実にはあり得ないファンタジックなガラスなのか、長年、靴の素材が論争の的になっていたが、どうやらガラス説に落ち着いたようだ⁴¹⁾。

豊穡の象徴である金と処女や冥土の象徴であるガラスと⁴²⁾、どちらが王の嫁の靴の素材として相応しいかという、中世の現実には照らし合わせると金に軍配があがる。しかし、17世紀末に貴族の子女教育のために童話集を出版したペローは、処女性を強調するガラスの靴を選んだ。

近代のディズニーは「白雪姫」や「眠り姫」ではグリムのお話を採用したのに、シンデレラではペローのお話を採用する。処女教育や受動的な存在としての女性像に、近代社会が求めている「女らしさ」を見たからであろう。ディズニーの「シンデレラ」は爆発的な人気を呼び、「シンデレラ・シンドローム(症候群)」という現象を巻き起こす。苦しくても黙って耐えていれば、いつかは私にも王子様が現れると信じて、ひたすら待っている女の子の出現だ。やたら理想が高くて、そのくせ自分は理想の女性から程遠い存在なのに、いつかは理想の男性が現れると信じて待っているのは、ガラスの靴を履くディズニー版のシンデレラに自分を同化させているからだ。民が口承で伝えたグリムのシンデレラは、金の靴を履く豊穡な女性で、法的知識を駆使して積極的に行動した、ということをも彼女たちが知っていたら、果たして待ち続けるだろうか。

(5) 女性の運動神経

ディズニー版では夜中の12時が過ぎたので魔法が解け、シンデレラはみすばらしい姿で走って帰る。グリム版では12時に魔法が解けるなどという約束はなく、日暮れになったので灰かぶりは王子に暇乞いをする。貴族の子女教育のために書かれたペローの本には、12時という門限が設けられているが、ディズニーもそれを採用したのだろう。しかし、グリムの灰かぶりには門限はない。そもそも宴は夕方ではなく昼間に開かれる。初版では夕方に開催され12時の門限が設けられているが、第2版以降の版では、フィーマン夫人やシュタイン氏が語る類話を採り入れて話が再構成されたので、昼間開催の話にされてしまう。

近代以前の社会では「ゲッティンゲンでは、堅信礼を受けていない少女(16歳ぐらい)が、母親の付き添いなしでダンスに参加することは認められていなかった」⁴³⁾。しかし、フランスでは昼間なら、少女が1人でダンスに行ってもよかったが、夜は母親を伴わなければならなかった⁴⁴⁾。共同体の伝統的取り決めに従うには、少女が1人で参加するダンスは、夜ではなく昼間に開催されるべきだ、とグリム兄弟が判断したのであろう。

その類話には鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に飛び乗ったり、運動神経抜群の女の子が出現する。灰かぶりは送らせてくれという王子を振り切り、さっと身かわして1回目は鳩小屋に飛び込み、2回目はリスのように素早く裏庭の梨の木に飛び乗る。3回目はタールを塗られた階段に金の靴を片方(左の靴)とられてしまうが、そのまま走り去る。王子は足の速い娘に追いつくのは不可能と判断して、翌朝、金の靴を持って灰かぶりの家を訪れる。グリム版のシンデレラは運動神経が抜群に発達している。俊足で跳躍力があり障害物にも強く平衡感覚にも優れている。しかも彼女は正装用のドレスをきてサンダル状のミュールを履いているのだ。ズボンを履いて普通の靴を履いている王子が、彼女に追いつけないとすると、彼女の脚力がよほど優れているか、王子の脚力がよほど劣っているか、どちらかであろう。彼女は裕福な家庭で育ったが、継母や継姉たちに酷使され、過酷な家事を押し付けられていたのだ。筋力がついていたのだろう。電気や水道がなかったころの家事は、水汲みや洗濯にしてもかなりの重労働で、

体の筋力は当然、鍛えられる。一方、王子は中世貴族として騎士のスポーツ(馬上槍試合⁴⁵⁾)はたしなんだであろうが、馬車や馬で移動したので、自分の脚力を鍛える機会はほとんどなかったのではないか。出産能力だけでなく、運動神経抜群の健康な体を持つ灰かぶりは、王子にとってこの上なく魅力的な相手に思えたはずだ。しかも彼女は王子を振り切って帰ろうとする。名前も素性も明かさないところが、物欲しげでなく実にミステリアスだ。王子が虜になるのもわかる。自分の周りにいる貴族女性にはまず見当たらないタイプだ。花嫁を王家からではなく、一般の富裕市民階層から募るということは、王家に豊穡をもたらす女性、すなわち後継者である子孫や富をもたらす女性を公募したのであろう。金の服に金の靴を身につけた灰かぶりは、抜群のダンス力と運動神経でその試験に見事合格したのである。

(6) 冷酷な父親

ディズニーでは父親はまったく出現しない。しかし、彼が参考にしたペローの話では父親は存在する。そこではシンデレラはいじめられていることを父親に訴えても無駄だと思って、自分の窮状を伝えない。なぜなら父は、すっかり継母の尻に敷かれていたからだ⁴⁶⁾。このような情けない父親が出現する場合、ディズニーは父親を登場させない。死んだことにしてしまう。近代家族のなかで家父長である父親のイメージを損なう表現を、ディズニーは巧みに削除する。ディズニー作品が近代の多くの家族に受け入れられたのは、このあたりに理由があるのかもしれない。

一方、グリム童話では実子に冷酷な父親が現れる。初版では現れなかった冷酷な父親を、第2版以降にあえて入れている。自分の娘とわかっていて、父親が鳩小屋を斧で叩き割ったり、梨の木を切り倒したりするのはなぜなのか。新しい妻とその連れ子たちとの生活が大切で、亡き妻の忘れ形見である灰かぶりの存在が疎ましくなっていたのだろう。子どもを出産後、死亡する妻が多かった中世では、男性は再婚することが多かった⁴⁷⁾。その場合、新しい妻を中心とした新しい家族との幸せを死守しようとして、父親はできるだけ過去のことを忘れようとする。血を分けた実子より、後妻と連れ子を大切にする父親は、近代家族の父親像とはかけ離れた存在だ。近世や中世の父親像に近い存在といえよう。

近世や中世では家族は愛情で結ばれた情緒的共同体ではなく、生産の場であった。家父と家母が共同組織の長として、経済機構としての所帯を管理していた⁴⁸⁾。灰かぶりの父親は、農民や職人ではなく、裕福な市民で商業に携わっている人のようだが、近代のピュルガー(富裕市民)ではない。家父長としての家族愛を感じられないからだ。家族愛や母性愛やロマンティック・ラブ(恋愛感情)は近代家族の産物であって、伝統社会の家族の間では見られなかった。伝統社会で夫婦を結びつけていたのは情緒ではなく、経済観念だったのだ⁴⁹⁾。

灰かぶりが女中として酷使されているのを見ても、父親は何も感じず何もしない。近代家族の父親なら、3人の娘を平等に扱うよう、継母をたしなめるだろう。しかし、灰かぶりの父親は実の娘に興味を示さない。邪険に扱い、殺そうとさえする。経済的機構としての家族にとって大切なのは、まずパートナーである配偶者であって子どもではない。結婚が経済契約⁵⁰⁾であったとすれば、継母は再婚するときに相当の持参金をもってきたはずだ。それは商人である彼にとっては、このうえもなく大切なものであった。実子より後妻を大切にしなければならなかったわけだ。「男には一生に2度幸せな日がある。それは妻をめとるときと、葬るときである」というアンジェ地方の農民の諺は⁵¹⁾、そのことを端的に表現している。

子どもに限りない愛情がそそがれるようになるのは、近代家族になってからだ。「今日では繊細な優しさとか愛情あふれる親しさなどは通常の両親と子どもの関係の一部分であるかのように思われているので、われわれはそれが歴史的に見て常に不変なものだと思いがちだ。しかしながらこういった特性は、1850年以前においては、母親と小さな子どもとの関係のなかでは相対的にまれであった⁵²⁾。」母親と小さな子との関係が、現代のような愛情で結ばれていなかったのなら、父親と子どもとの関係は推して知るべしだ。

母性愛や父性愛は自然に備わっている本能ではなく、経済状態や人間関係などの環境によって左右される後天的なものなのだ。それは慈しみながら子どもを育てる過程のなかで芽生えてくるものなのであ

ろう。何が「母親らしく」、何が「父親らしい」かは、時代によって、社会によって、文化によって基準が異なるジェンダーなのだ。灰かぶりの父親が子どもに無関心なのは、近代以前の社会における家族関係を反映しているからであろう。

(7) 灰かぶりの復讐

ディズニーでは、シンデレラは王子と結婚していつまでも幸せに暮らしました⁵³⁾、で話が終わり、復讐のエピソードはない。ディズニーが参考にしたペローの話では、シンデレラは王妃になると、姉たちが謝罪に来たので許してやり、重臣と結婚させてやる。心優しいペローのシンデレラは、女性の「しとやかさ」を何より大切な美德とする⁵⁴⁾、16世紀末のフランス宮廷社会の規範を体現している。なぜなら、「しとやかさ」というフランス語「グラス(grâce)」には、「恩赦、慈悲」という意味も含まれているからだ。一方、近代社会は女性の「しとやかさや慈悲」より「美しさ」を重視する。結婚するシンデレラの美しい姿で話を終えて、その後のエピソードを省略したのは、ディズニーの卓見であろう。その方が花嫁の美しい姿を読者の心に強く刻みつけることができるからだ。

一方、グリムの灰かぶりは幸せになったからといって、これまで自分に対して不当な扱いをしてきた人々を許しはしない。相応の報いとして罰を与える。結婚式の日に2羽の鳩がやってきて、行列に付き添う継姉たちの両目をつつきだし、盲目にしてしまう。「彼女たちは意地悪をしたり、嘘をついたりしたので、罰として一生盲目でいなければならなかった⁵⁵⁾」で話は終わる。

決定版にあるこの復讐のエピソードは初版にはない。第2版で挿入されたものだ。初版では王子が花嫁だと確信して灰かぶりを馬車で連れて帰ると、門のところで鳩たちが「本当の花嫁だ」と保証してくれる。それで話が終了する。結婚式にも復讐にも触れないまま話が終わっている。継姉たちが鳩によって罰せられるエピソードが挿入されたのは、グリム兄弟がそこに中世人の思考法を読み取ったからであろう。中世社会では自分が不当な扱いを受けたのに抗議しなかったら、相手の行動を正当だと認めたことになる。

「灰かぶり」では彼女が自ら復讐するのではなく、神的存在である鳩によって、「眼球除去の罰⁵⁶⁾」が与えられる。眼球除去は死刑ではなく、切斷刑である。罪を犯した者は、その罪を犯すときに使った部位が除去されれば、悪が退治されると信じられていた⁵⁷⁾。姉たちの目がえぐり取られたのは、彼女たちが性悪で強欲だったからだ。目は「人格の鏡」、「心の窓」と信じられていたのだ⁵⁸⁾。継姉たちの目を除去すると、悪い心根が除去されると判断されたのだろう。

「眼球除去」の刑を実行した鳩は、灰かぶりとは無関係な存在ではない。彼女がハシバミの木に願掛けをすると現れ、彼女の願いをかなえてくれる神的存在だ。つまり、これは天罰ではなく、彼女の復讐だったのだ。

5. 結論

グリム童話の灰かぶりは、ディズニーのシンデレラとまったく異なる。継母にいじめられても泣き寝入りするのではなく、亡くなった実母の遺産相続を父親に法的メタファーを使って主張する。洋服や宝石を求めた継姉たちには、ハシバミの若枝を頼んだ彼女の意図は解せなかっただろう。枝の授受は遺産の譲渡と相続の完了を意味するという慣習法の知識を、灰かぶりは密かに身につけていたのだ。その枝を実母の墓に埋めて、彼女は財産を墓に隠す。そして継母や継姉たちが出かけると、彼女は墓に行き、金銀のドレスや靴を身につけて、舞踏会に出かける。ドレスがなくて泣いていると、妖精が現れて変身させてくれる他力本願なディズニーの娘とは対称的な娘だ。王子と踊っても送ってもらうことを拒否し、信じられないほどの俊足で走り去る。鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に飛びついたり、追いかける王子をあの手この手で振り切る。タールに左の靴がくっついて脱げてしまっても、あわてることなくそのまま走り去る。もしかすると彼女は、靴を手に入れる者はその人間を所有する、という慣習法も知っていたのかもしれない。金の靴を王子に委ねた時点で、自分は王子のものになると知っていた彼女は、余裕

を持って王子の到来を待っていたのだろう。法的メタファーを駆使して王子を懐柔するグリムの灰かぶりは、なんと知的で賢い娘なのだろう。そのうえ運動神経が発達している。徒競争でも、障害物競争(鳩小屋突破)でも、垂直飛び(梨の木に跳躍)でも、男性顔負けの実力を発揮する。こんな知力にも体力にも優れたたたかな娘と結婚したら、おっとりとして育ちのよい王子はきっと尻に敷かれるだろう。

グリムの灰かぶりには貴族社会の女性の姿ではなく、生産活動に積極的に関与していた近世や中世の平民女性の姿が反映している。「女は内で消費者, 男は外で生産者」とされた近代女性の姿ではない。ディズニーのシンデレラが「従順で受動的な女性」であるのは、性別役割分業が叫ばれた近代女性の理想像が描かれているからだ。男性は逞しく積極的, 女性は従順で消極的という、近代の「男らしさ」「女らしさ」が、絵本やアニメーションに巧みに挿入されている。

性別役割分業社会が崩壊し、男も女も再び生産活動に携わるようになったポスト近代になっても、シンデレラ・シンドロームにかかっている女性たちは少なくない。彼女たちは知的でたたかなグリムのシンデレラの存在を知っても、相変わらず「王子の出現」を待ち続けるのであろうか。

注

- 1) メルヒェン(Märchen)というドイツ語は、日本語に直すと「昔話」に相当する。童話という訳語は厳密には不適切だが、日本語では『グリム童話集』という訳語が定着しているのでここでも使用する。しかし、より正確に表現したいときには、「メルヒェン」と表示することにする。
- 2) Steig, Reinhold: Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. 2. Aufl. Bern (Lang) 1970 (1. Aufl. 1894), S.89.
- 3) Ebd. S.139.
- 4) 『グリム童話集』(Kinder-und Hausmärchen)はKHMと略記し、その後に決定版の番号を記入して表示する。
- 5) 山下尚子・柳沢泰彦編『ディズニー・名作ライブラリー I』文立原えりか 講談社 1994年 114-121頁。
- 6) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Frankfurt (Reclam) 1980. Bd.1, S.137-144.
(決定版訳本: 池田香代子訳『完訳グリム童話集 1-3』講談社 2008年)
- 7) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. v. Heinz Rölleke. a.a.O., Bd.1, S.138.
- 8) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe in der Urfassung. Hrsg. v. Friedrich Panzer, Wiesbaden (Vollmer) 1953. S.111. (初版訳本: 吉原素子他訳『初版グリム童話集 1-4』白水社 1997年)
- 9) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Köln (Diederichs) 1982 (1. Aufl. 1819) S.86.
(第2版訳本: 小澤俊夫訳『完訳グリム童話 1-2』ぎょうせい 1985年)
- 10) Grimm, Jacob und Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. Bd.14. München (dtv) 1984 (1. Aufl. 1893) S.714.
- 11) Grimm, Jacob: Deutsche Mythologie. Frankfurt/M (keip) Nachdruck 1985 (1. Aufl. 1835). S.546.
- 12) Grimm, Jacob und Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. Bd.30. München (dtv) 1984 (1. Aufl. 1960) S.2037.
- 13) Grimm, Jacob: Deutsche Mythologie. a.a.O., S.546.
- 14) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Frankfurt (Reclam) 1980, Bd.3. S.451.
- 15) Ebd.
- 16) Ebd.
- 17) 永森羽純『帽子物語』河出書房新社 1995年 140頁。
- 18) Grimm, Jacob und Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. Bd.5. München (dtv) 1984 (1. Aufl. 1897) S.3554.
- 19) 阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社 1981年 213頁。
- 20) 13世紀から15世紀にかけて様々な職種に数多くの婦人たちが働いている姿が見られた。同上 235-236頁。
- 21) アト・ド・フリース著 山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店 1984年 164頁。
- 22) 同上。
- 23) Shorter, Edward: The Making of the Modern Family. New York (Basic Books) 1975, p.90.
(エドワード・ショーター著 田中俊宏他訳『近代家族の形成』昭和堂 1987年)
- 24) Ibid., p.95.

- 25) 池上俊一 『歴史としての身体』 柏書房 1992 年 26 頁.
- 26) 網野善彦 阿部謹也 『中性の再発見』 平凡社 1994 年 137 頁.
- 27) アト・ド・フリース著 山下主一郎他訳 前掲書, 577 頁.
- 28) 同上.
- 29) バラッド『ウィリーの女房』 Willy's Lady では, 左の足の靴が脱げないために彼女は出産できない. 同上.
- 30) 同上, 287 頁.
- 31) 同上, 545 頁.
- 32) 同上, 577 頁.
- 33) Weber=Kellermann, Ingeborg: Die deutsche Familie.Frankfurt/M (Suhrkamp) 1974, S.20-21.
(インゲボルク・ヴェーバー=ケラーマン著 鳥光美緒子訳 『ドイツの家族』 勁草書房 1991 年)
- 34) 前野みち子 『恋愛結婚の成立』 名古屋大学出版会 2006 年 332-333 頁.
- 35) 上野千鶴子 『発情装置』 筑摩書房 1998 年 99 頁.
- 36) 同上
- 37) 同上
- 38) ジャック・ル・コブ著 桐村泰次訳 『中世西欧文明』 論創社 2007 年 532 頁.
- 39) シャルル・ペロー著 今野一雄訳 『ペローの昔ばなし』 白水社 1996 年 120-142 頁.
- 40) ジャック・ル・コブ著 桐村泰次訳 『中世西欧文明』 前掲書 563 頁.
- 41) アラン・ダンデス編 池上嘉彦他訳 『シンデレラ』 紀伊國屋書店 1991 年 145 頁.
- 42) アト・ド・フリース著 山下主一郎他訳 前掲書, 282-283 頁.
- 43) Shorter, Edward: The Making of the Modern Family, op. cit., p.127.
- 44) I bid. pp.127-128.
- 45) 池上俊一 『歴史としての身体』 前掲書 33-34 頁.
- 46) シャルル・ペロー著 前掲書 121 頁.
- 47) ロバート・ダントン著 海保真夫他訳 『猫の大虐殺』 岩波書店 1990 年 33-39 頁.
- 48) Weber=Kellermann, Ingeborg: Die deutsche Familie. a.a.O., S.73.
- 49) Shorter, Edward: The Making of the Modern Family, op. cit., p.57.
- 50) Weber=Kellermann, Ingeborg. Die deutsche Familie. a.a.O., S.19.
- 51) Shorter, Edward: The Making of the Modern Family, op. cit., p.58.
- 52) 阿部謹也 『甦える中世ヨーロッパ』 日本エディタースクール出版部 1987 年 224 頁. Shorter, Edward: The Making of the Modern Family, op. cit., pp. 75, 191-193.
- 53) 山下尚子・柳沢泰彦編 『ディズニー・名作ライブラリー I』 前掲書 122 頁.
- 54) ペローは教訓として, 美しさより, 「しとやかさと言われるものこそ, なによりだいじなもの, もっとも値打ちのあるもの」と書いている. シャルル・ペロー著 前掲書 141 頁. Perrault, Charles: Contes de Fées. München (dtv) 1975, p.92.
- 55) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Frankfurt (Reclam) 1980. Bd. 1, S.144.
- 56) 阿部謹也 『甦える中世ヨーロッパ』 前掲書 255 頁.
- 57) カレン・ファリトン著 飯泉恵美子訳 『拷問と刑罰の歴史』 河出書房新社 2004 年 25 頁.
- 58) 池上俊一 『歴史としての身体』 前掲書 95 頁.